

# 日本の魅力を体現する伝道師 —邦楽三味線

## 演奏を体験しよう

三国駅から出て、歩いて六分ぐらいで目的地に着いた。中に入ると部屋の装飾と気品のあるおばあさんにひかれた。



（「竹よし」店 ZHAO 撮影）

弾き始めると、基本奏法に時間をかけた。先生は弾きながら私たちに指導してくれた。今回練習した「さくらさくら」の曲は、特に余韻が大切。強くはじかないで、や

わらかく、ゆったりしたテンポで演奏するのが大切だそうである。苦戦しながらも楽譜とにらめっこして弦をはじき続けること30分。何とかつかえながらもメロディが弾けるようになった。体験用の楽譜には、弦のどのあたりを押さえ、何番目の弦をはじくかなど、わかりやすく記入されているので、初心者でも簡単に弾くことができる。

「三味線の弦は3本だけ。3本で表現しようと思ったら、スピードや音の強弱をつけたり、間をとったり、余韻を残したり、空間で表現するしかない」そうだ。感覚的な表現力が必要とされるようである。また、三味線は楽譜を見ながら弾く楽器ではないので、メロディを身体に覚え込ませることが大事だとか。伝統工芸の素晴らしさを体感できた。おもてなしの心を、とても感じた。

「さくら」を聞き、三味線の働きが生み出す特質や雰囲気など感受しながら、三味線の音色や奏法の特徴を生かした音楽表現を楽しんでいた。やはり三味線の音色には、誰もが惹かれて癒される！

## 三味線の新時代がやって来る

そんな日本の伝統的和楽器三味線だが、やはり若者に人気がなかった。しかし、新時代の三味線の代表的な人物である吉田兄弟が伝統的な津軽三味線で現代の曲をアレンジしたり、様々な楽器とのセッションを楽しんだり、海外でも注目を浴びているそうだ。だんだん若い奏者も活躍している。三味線という伝統楽器に、新たな風を起こしている。

伝統的な三味線と現代のポピュラー音楽を結びつけることについては、身近な日本人にもインタビューしてみた。「これは三味線をよりよく伝承できるように良い方法だ」とみんなが口を揃えて思っている。

これにより、日本の伝統的な楽器を世界に向けられるようになった。それが新時代に三味線の魅力の体現ではないだろうか。

## 三味線とは？

三味線の歴史について少しお話しすると、三味線は琉球の「三線（さんしん）」という楽器が元になっており、室町時代に琉球から本土へ伝わったといわれている。その後、琵琶の奏者や職人が多くの改良を加えて、象牙や木製のばちを応用したのが三味線の始まりだ。時代とともに猫皮を張ったり、形や大きさを改良したりして、日本人の耳に好ましい音色が出るよう工夫され、現在の三味線に近づ



CUI FENGJUAN

XIAO DUO

HONG FAN

ZHAO RUSHUI

## 情緒あふれる日本の音

日本の風土、自然環境に恵まれた歴史の中で、日本民族が育まれた特有の繊細な感覚、情緒ある感性から、三味線という楽器が誕生した。今となっては津軽三味線、ポップ三味線、バンド三味線という三種類の三味線があるが、その中のどれも撥を用いる奏法により打楽器的效果が加わり、音色の変化幅が広がって、他の楽器に類を見ない表現力を発揮することの出来る楽器である。

バイオリオン、ピアノやサクソなど西洋の楽器と比べて、三味線音楽は水墨画的のような感じがするのだろう。ゆったりとした哀愁のついた音色、弾けば弾くほどその不思議な魔力に心を惹かれて、言葉では表すことの出来ない、魅力溢れる楽器である。

とはいえ、実はそれほど敷居の高いものではない。若くて綺麗で笑顔満面の先生のきびきびと明快な指導のおかげかもしれないが、実際に三味線を両手に持って一曲弾いてみたら、すぐ不思議な譜面と馴染みの少ない音調に心を惹かれたのだ。音楽の素養もない身で大した上達は見込めないが、それでも未知の世界と日本特有の楽器に触れることができて新鮮で楽しかった。



（芳村先生 CUI 撮影）

## 芳村竹世志 先生に聞き ました

三味線は時代遅れな感じがするが、好きな人はまだまだ多いようだ。三味線を習いに来る人もよくいるし、三味線についてよく知らない若者たちも好奇心から入ってくる。巡回の演奏もしていて、大部分は年寄りの人だ。三味線の魅力といえば、日本人の心を象徴しているというところだ。三味線のメロディーを聞くと、よく「日本らしい」と感じ。三味線と現代音楽と結びついていることは素晴らしいことだと思う、しかし、津軽三味線は現代音楽を弾きやすく、今日使っている三味線は一度も試したことがない、やはり伝統的な日本式の風格に合っている。